# 中国　造墨史図説

Iconography of SUMI INK History in China

**「中国製墨資料」**
**李孝美　「墨譜」**
**沈継孫　「墨法集要」**

綿　谷　正　之
Masayuki WATATANI

## はじめに

墨は中国を中心とする漢字圏の国において文化の担い手として重要な役割を果たしてきた。原料のすす（炭素末）は永久不変の顔料で、筆記具として4,000年に連なる人々の生きてきた姿とその歴史を朽ちることなく今に伝え、更には書画芸術にはなくてはならぬ材料のひとつとして人々の生活の中に脈々と息づいてきた。

墨はこの奈良の地において、1,300年造り続けられている最も古い伝統産業である。私が43年間籍を置いていた呉竹（くれたけ）は、明治35年（1902）創業以来墨づくりを事業の中心に置き、墨を造り続けてきた。人々の意思の伝達手段、記録、書画芸術等にとって貴重な材料としての墨にまつわる仕事をしてきた私にとって、墨への思いは特別のものがあり、呉竹を離れた今もライフワークとして勉強を続けている。

28才の頃、私は営業を命ぜられ、新潟県から舞鶴までを担当した。文具問屋、書道用品店、学校、習字塾、書道家と多様なお客様を訪問して呉竹の墨や液体墨を宣伝し注文をいただくのである。富山で最も大きな書道会の会長宅を訪れた時のことであった。「綿谷君、珍しい墨を見せてやろう」「この墨はなあ、中国明の時代に程君房という墨屋が造った百子図と言う墨や。400年以上もたっているのにソリも割れもしていない。大した墨や。今でも生きていて、十分使える。日本の墨で400年もたったら多分死んでしまい使い物にはならんやろう。呉竹もこの墨に負けんような500年墨を研究したらどうや」

私にとっては全く未知の世界の墨の話であった。にぶい艶を発する程君房の百子図が「墨の勉強をせよ」と私の心に火をつけてくれた。その年の秋、奈良国立博物館で恒例の正倉院展が開催され、筆墨硯紙が展示された。墨は唐の玄宗皇帝が遣唐使を経て聖武天皇に贈ったといわれる唐墨「華烟飛龍鳳皇極貞家墨」新羅墨「新羅武家上墨」「新羅楊家上墨」が1,300年の年月を経て完璧な姿で保存されていた。再び私の心に火をつけてくれたのであった。

墨はいつどうして生まれたのか。どんな過程を経て今の墨になったのか。日本の墨と中国の墨の違いは？なぜ奈良が墨の産地になったのか。等々素朴な疑問から始まった墨の勉強は、中国の時代時代に残された墨の記録、文献をひも解くことから始まった。

墨は原料であるすすによって松煙墨と油煙墨に大別される。後漢（紀元25 ～ 220）の時代、すすを松の木を燃やして採取することが始まって墨（松煙墨）が造られてから北宋（960 ～ 1127）まで、おおよそ1,000年の間は松のすす、松煙が唯一の原料であった。それが北宋の時代に植物の油を燃やしてすす（油煙）を採ることが始まり、明（1368 ～ 1662）には松煙墨、油煙墨がそれぞれに造

られ、現在の墨づくりに繋がっているのである。1095年（紹聖２年）北宋の李孝美が著した「墨譜」には松煙墨の製造工程が図録で掲載され、300年後明洪武年間（1368 ～ 1398）に沈継孫の「墨法集要」に油煙墨の製法が詳しく図で示された。他には目にすることのできない墨づくりの貴重な図録である。

40年前、中国に残された墨に関する文献を解読から始めた書の学習は、明代以前に著された晁貫之「墨経」何遠「墨記」陸友「墨史」そして李孝美「墨譜」沈継孫「墨法集要」を漢方薬研究の赤堀　昭氏、山田　正氏の力を借りて翻訳することができた。

今回の研究記要に掲載するのは、松煙墨と油煙墨の製墨図とその解説文の訳文である。2014年「墨の文化史概説」2016年「墨の不思議な魅力」に続くものであるが、40年前墨の研究の記録として残しておいたものを整理し図録にまとめた。

保育学院の研究記要になぜ墨が？と疑問をお持ちになるのはもっともなことである。奈良が1,300年続く唯一の墨の産地であり、学院がその奈良にある所以をもって、本研究記要の誌面をいただくことをお許し願いたい。

1．李孝美「墨譜」

李孝美
墨譜

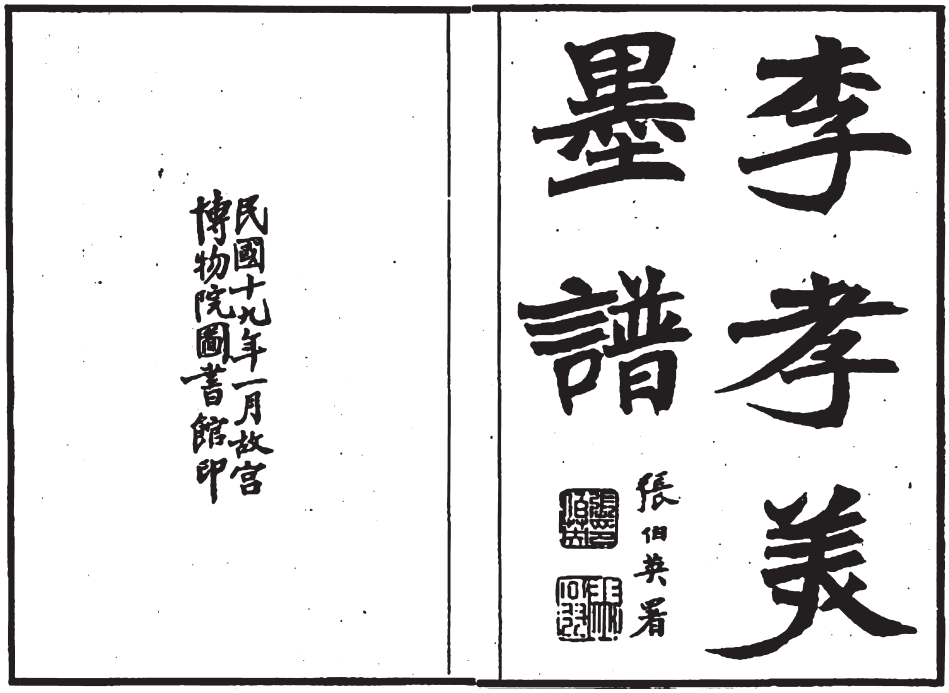
張伯英署

民國十九年一月故宮
博物院圖書館印

目録

墨譜卷上目録

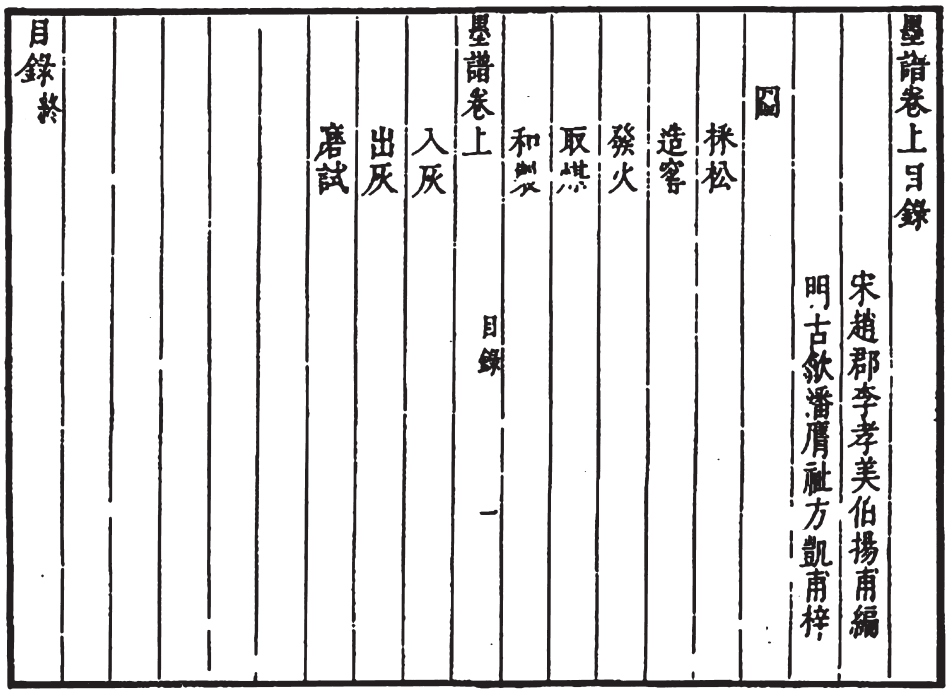
宋趙郡李孝美伯揚甫編
明古歙潘膺祉方凱甫梓



圖

採松
造窰
發火
取煤
和製

墨譜卷上　目録　一



入灰
出灰
磨試

目録終

### 採松（古松の伐採）

古い松の太くて脂ぎったものを採り、小枝を切り離し、皮を削り去って用いる。このようなものが混ざっていると、先に白い灰になってしまうことを憚られるからである。灰が煙について混ざると、煤は純粋でなくなり、美しくなくなってしまう。

### 造窯（採煙窯の造成）

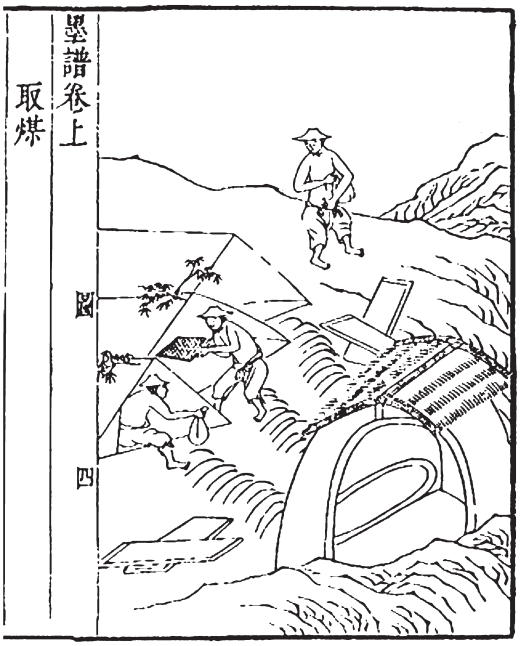
右の図のように窯を造るには長さ九尺、幅一尺余の板を用いる。板は二枚ずつ、むかい合わせに寄せて並べ、全部泥で封じる。窯の端の一角に煙突を作る（つまり窯の高いところの下の角を煙突にする。その径は二寸ばかりにする。もし窯の調子が悪くなって、火の燃え方に障礙（しょうがい）が起ったり、煙のでかたがよくない時は、煙突を開いて加減し、燃え方を適当にし、目的を達したら閉じるようにする）。窯の中心の地面上にも気を取出す孔がある（これは直接煙突の外に通じ、気を取出す役目をしている）。その窯は十二歩の長さがあり、低い方の一辺には煤取り用の小さな門をつくっておき、一辺は石板をむかい合わせに並べて煙の道としている。最初の六歩の長さの部分を大巷といい、次のやや小さい一歩を拍巷、次のだんだんに低く小さくなっていく五歩の部分を小巷、次の半歩を燕口という（幅二寸、高さ五寸の孔があいているだけである）。火を焚く場所のしたには台を置き、その下には二つの小さな池を掘っておく（一つの池は水を入れて箒をつけ、灰を掃うためである）。

### 發火（松と窯でくすべる）

右のように窯は三、四個の孔を並べて持っているが、そのうちの一、二個は火を弱めるために残しておく。松は二、三本ずつほそぼそと燃す。六、七分燃えた頃を見はからって、残った部分を他の孔（に移して）燃す。落とすことが必要な灰ができたら、すぐに湿った箒で、くぼみの中に掃い落し、舞い上がらないようにする（別の孔では皆普通の煤を取る）。

### 取煤（煤を窯から採り出す）

右のように煤をとるためには、松を十日間燃しつづけて止める。窯が冷えるまで待たず、煙道の壁にある小さな入り口を開いて、そこから中に入って、扇子で煤を取り、そのついている場所によって前、後、中の三種類に分ける。その中で後すなわち一番奥についているものがもっともよく（墨苑には煙突の一番先にあるものを上品にすると書いてある）、まんなかのものがその次で、一番手前のものがその次である。そこで窯の一番遠い板についているものを茸頭といい、それを十分に揉んだものを珠子という。最良の煤でこれ以上のものはない。

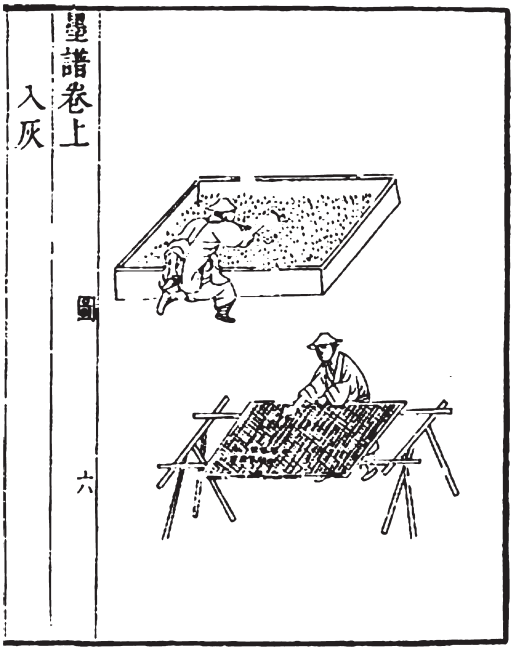


### 和製（墨玉を煉り合せる）

右のように、良質の混ざり物のない煤を用い、乾かして搗き、細かい絹の篩で、かめの中で篩って草や埃を除く。この時に外で篩ってはならない。飛び散ってしまうおそれがあるからである（あるいは目のつまったうすぎぬを使い、上下を紙で覆って袋状にして、その中で篩ってもよい）。まぜる度毎に膠と煤を入れ、かき混ぜて均質になったら、鉄製の臼のなかに入れる。この時むしろ水分が少な目の方がよく、多過ぎてはいけない。杵でつく回数は三万回が標準で、多ければ多いほどよい。墨造りは二月と九月が最もよい。温い時は腐敗して臭くなるし、寒いと乾きにくく、どろどろして固まらない。風に当ると砕けてしまう。重さは三両（112g）以上にすることはできず、むしろ小さい方がよく、大きくしてはならない（この説は『齊民要術』の韋誕の墨法中に出ている）。

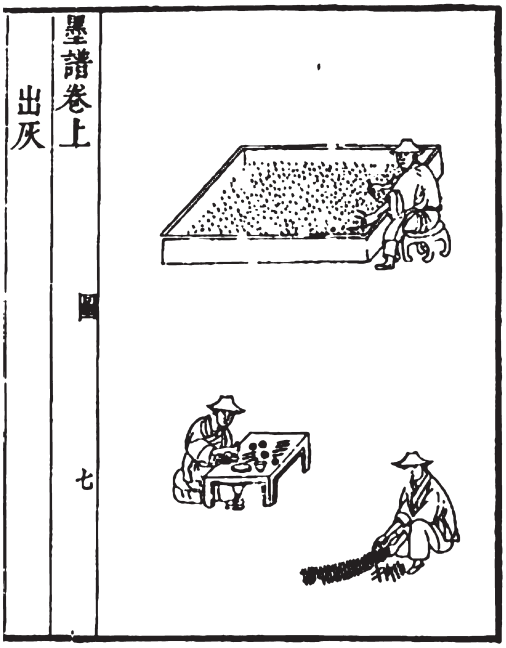
### 入灰（灰にうずめて乾燥）

右のように、よい柴の炭の粉末と灰を等量混ぜ、細かい目の篩で篩い、手で圧えて平にする。紙を敷いてその上に墨を置き、その上を紙で覆ってから、灰を置いてすきまのないようにする。五、六日経って出すのがよい。また灰の中に埋めて乾かさずに、隙間のない部屋の中に、床からの高さ三尺の棚を作り、その上に箔を置き、灰の代りに糠を用いて乾燥する方法がある。糠は麦でも稲でもどちらでもよく、墨造りに不都合な点はない。この方法は兗州の陳氏だけが代々用いているものである。



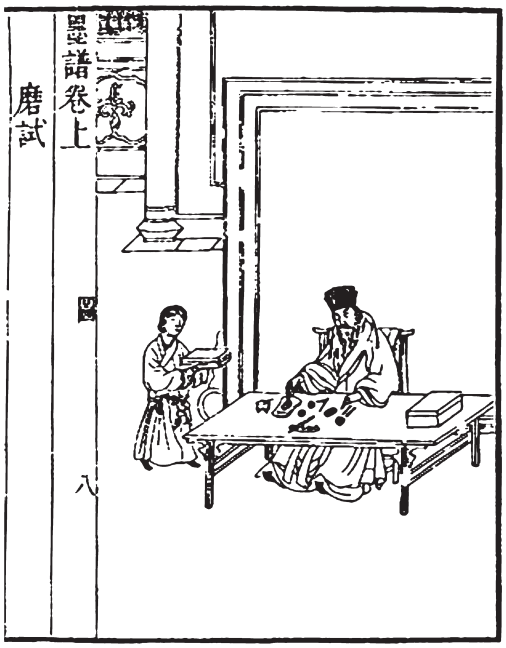
### 出灰（灰から出す）

右のように墨を灰のなかから出したら、縄に挟み込んで梁（はり）の間に掛ける（壁に近づけてはならない。近づけると墨が曲ってしまう）。乾くのを待ち、水でぬぐって平にして汚れを除いてから、再び黄蝋や滑石でこすって光沢を出させる。堅い出来上がりのものが非常によろしい。貯蔵する時には、うすぎぬの袋に入れて、風の通る場所にかけておくのがよい（これは『墨苑』に出ている）。




### 磨試（ためし磨（ず）り）

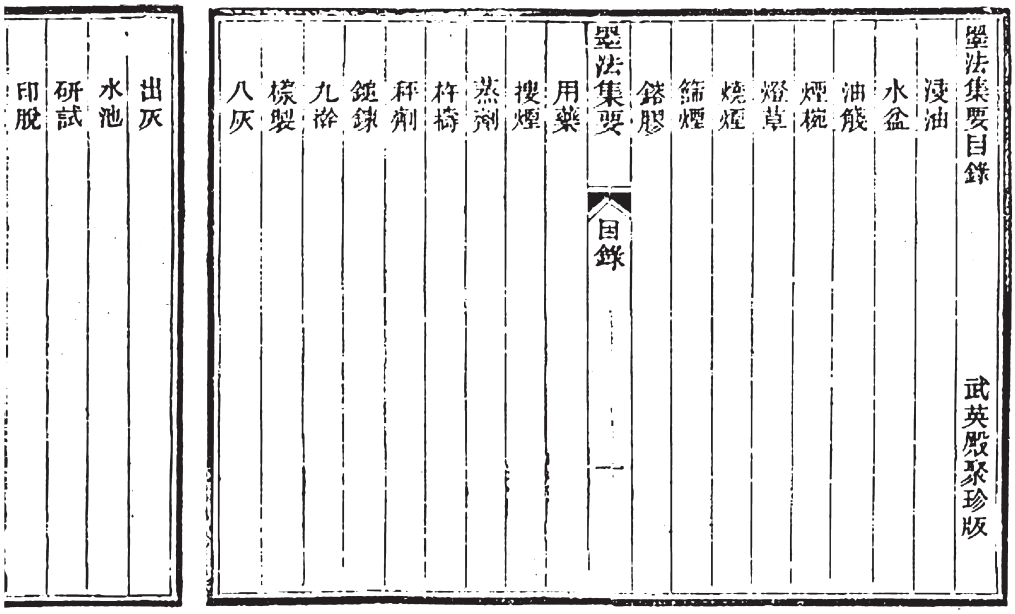
右のように、墨を磨（す）るには温度を上げないようにすることが肝要である。温度を上げなければ光沢が出る。熱を出してはいけない。熱を出すと沫（あわ）ができる。考えてみるのに、急いで墨を磨ることを嫌うのは、墨が熱を持つからである。李陽冰（りようひよう）も墨を磨るときには続けて磨り、途中で長くとめてはならない。長くとめると塵や埃が入って汚れ、その結果として膠の力がなくなり、墨の液は泥のようになってしまい、どろっとして筆につけても思うように書くことができなくなる、といっている（『墨苑』に書かれている）。



2．沈継孫「墨法集要」

墨法集要

目録

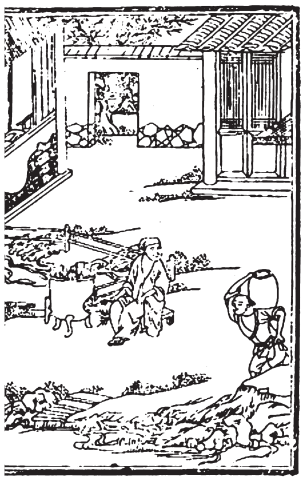

墨法集要目錄　武英殿聚珍版


浸油
水盆
油餞
煙椀
燈草
燒煙
篩煙
鎔膠


墨法集要　目錄　一

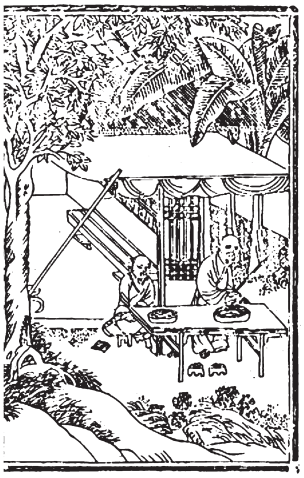

用藥
搜煙
蒸劑
杵擣
秤劑
鎚錬
九浴
檬製
八灰
出灰
水池
研試
印脫

## 浸油（油をひたす）



昔の墨造りの方法では、松を焼いて作った煤、つまり松煙だけを使ったが、近年になって始めて、桐油や胡麻油を燃して作った油煙を使うようになった。このほかに衢州（くしゅう）の人たちは、皂青油の煤を使っているし、蘇州の人たちは菜種油と大豆油の煤を使っている。以上の油からはいずれも煤を取って墨造りに使うことができる。ただその中で、桐油からが一番たくさん煤を取ることができ、しかも墨にした時に黒くて光沢があり、その色は年月を経るとますます黒さが増すのである。そのほかの油からは、どれからも煤のとれかたが少く、しかもそれを使って作った墨の色は、うすくて、つやがなく、年月を経るとますますうすくなる。（油の調製法としては）桐油十五斤、胡麻油五斤について、まず蘇方（すおう）木二両、黄連（おうれん）一両半、海桐皮（かいとうひ）、杏仁、紫草（むらさき）、白檀（びゃくだん）一両ずつ、梔子（くちなし）と白芷（びゃくし）半両ずつ、木鼈子（もくべつし）六個をつぶして砕いて胡麻油の中に入れ、半月余り浸しておく。その間常に杖でかきまわして動かす。油を燃やす前には、鍋に入れて薬品が焦げるまで熱をかけてから、火をとめて冷やし、沪（こ）して滓（かす）を除いてから、桐油の中に注ぎ入れ、かきまぜて燃やすという方法がある。今ではこの油の処理法を用いる人は少ししかいない。従ってここに記して昔からの方法を保存することにする。

## 水盆（油皿を冷やす盆）



（油皿を冷やす水を入れる容器としては）内径二尺一寸、縁（へり）の厚さ一寸、深さ三寸半の円形の厚い瓦製の盆を用いる。底は平らで、縁は底に対して垂直である。縁の近くに指の太さの孔を一個あけ、綿で塞いでおき、水を抜くときに使う。この水盆を高さ三尺の長い木製の台の上に置く。薄い甎（せん）を七個、縁に沿って並べ、盆の中央には縁の幅の広い瓦製の煙突用の円筒一個を置く。この円筒は内径六寸、外径八寸で、高さは水盆の縁と同じ高さにし、筒内にも薄い甎を一個置く。油を入れる皿は甎の上に一個ずつ、その縁が水盆の縁より三分低くなるように置き、水を皿の縁から三分下まで注ぎ入れる。中央のさらには鉄製の鴨脚に孔をあけて灯心を

入れるが、全部皿に灯心を入れ終ってから油を注ぎ入れ、長い柄のついた煙椀で蓋をして油を燃やす。もし盆の中の水が熱くなったら、少しずつ冷たい水を注ぎ、一度に全部冷水に換えてはいけない。冷たくすると煙の上りかたが悪くなり、煤の収量が非常に少くなる。水を少しずつ注ぐことが大切である。もし水が減って乾てきたら、水を入れて一杯にすることが必要である。時々縁の近くの煙椀と油皿一個ずつを取り去って、孔につめてあった綿を抜き、水を除いて乾かしてから、もう一度孔を塞いで、漏斗で水を入れる。このようにして水を（全部）入れ換えたら、油皿と煙椀をもとの位置に戻す。長い間、水を換えずにおいたため、油が浮いてきたら、竹の篦ですくって除く。水盆に浮いた油が乾いて硬くなり、盆の縁にくっついた時には刀かひらがねで削り取り、きれいな水で洗ってからもう一度使うべきである。このほかに杉で槽を作って水を入れる方法もある。その時には底の板を一番厚くし、横の板はそれより薄くする。内法（うちのり）は長さ七尺、幅一尺四寸、深さ三寸半とする。まん中に長い木の棒を渡して両側に分け、麻筋油と灰を混ぜたものを木の継ぎ目につめて、水が漏れないようにする。この水槽の端の板の底に近い場所に丸い孔を一個あけ、水抜き用とする。高さ三尺の二列の台の上にこの水槽をのせ、その水の中に縦に二列に甎と油皿を置き、それぞれの上に煙椀をかぶせる。水槽一個ごとに並べる油皿と煙椀の数は二十個ずつとする。油の燃やしかたは瓦製の水盆の場合と同じである。木のかわりに石で水槽を作る人もある。

### 油艧（ゆせん）（油皿）

油皿は紅砂（こうさ）で作った厚手のもので、口の直径四寸半、平たくて糸底が大きく、口縁に高低がなくて水を一杯に入れてもこぼれないようなものを用いる。薄い甎を下に置いて高さを加減し、水盆の中に置き放しにする。油皿の高さはその口が水盆の口より三分低いようにするのがよく、余り低くし過ぎるのはよくない。低くすると煙が飛び散ってとらえにくく、煤が蓋の中に残りにくくなる。これは水盆だけでなくて木や石で作った水槽の中に置く時も同様である。油皿の内側や外側が汚れてきたら、竹べらで汚れを削り取り、次に稲藁の灰でこする。それでもなおきれいにならない時は刀やひらがねできれいにし、もう一度水で洗い、拭いて乾かす。灰でこすることをせず、おもゆの中で数回ぐらぐら煮てから、刷毛でこすってかたまった油を除く方法もある。

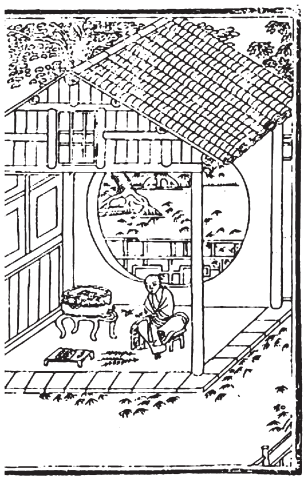
### 煙椀（えんわん）（煤を受ける椀）

水に通して雑ざりものを除いた細かい土を使って長い柄のある、直径五寸三分、深さ二寸五分、柄の長さ三寸、柄まで含めて高さ五寸五分の釜のような形をした底の深い瓦製の椀を作って焼く。

（使う時には）必ず磨いて十分光滑にしてから、椀の縁を外側は水盆の縁の上に、内側は瓦筒の縁の上に置き、その中心が焔の先端の真上に来るようにする。椀の縁の部分には少量のしょうがの汁を塗る。（煤が着いたならば）急いで煤を掃い落す。煙椀が油で汚れた時には、内側も外側もどちらもきれいに拭き取る。煤が油で汚れると使いものにならなくなるからである。

## 燈草（灯心をつくる）

太い黄色で堅く充実した灯心草を選んで、九寸の長さに切り揃える。これを処理するのには短くて痩せたものは除き、根本から先端までそなわっているものを取る。灯心一本を作るには十二本の灯心草を取って、ざらざらした板の上で片方の端を少量の綿でくくってから、手で堅く一本によりあげ、もう一方の端も少量の綿でくくってとめる。夏の非常に暑い時（に使う灯心）は灯心草を二本減らして十本だけをよって作る。つまりもとのように十二本のものを使うと、煙の出る量が多くなるが、質が悪くなるからである。四、五百本の灯心を捲きあげたならば、蘇方木の濃い煎じ汁の中で数回ぐらぐら煮る。灯心が紫色に染まるのをみたら、取出して汁をきり、日に当てて、からからになるまで乾かし、紙に包んで貯蔵する。塵をつけて汚さないことが大切である。必要がある度ごとに紙包みの中から取り出す。



## 焼煙（油を燃やして煤を採る）

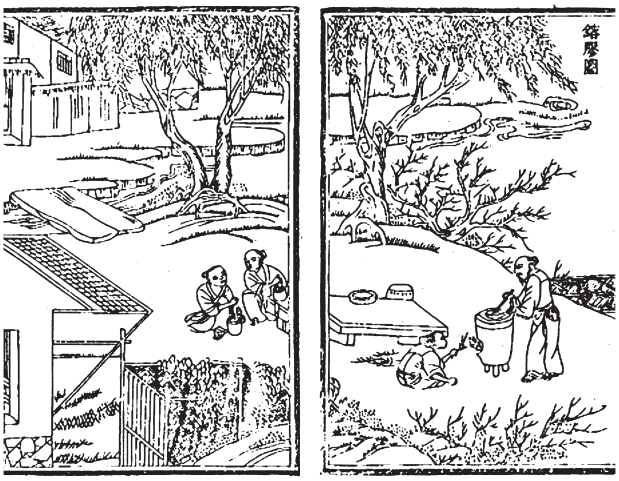
秋の終いから冬の初めが（煤を作るのに）よい。明るい隙間のない部屋の中に、上に塵除けを置き、四方を密閉し、裏側にだけ小さな孔をあけておく。かまちに紙のとばりをかけ、水盆を木の台の上に、水抜きの孔が台の外に出るように置いてから、孔をふさぎ、水を甎がかくれる高さまで注ぎ入れる。それから油皿を水中に入れ、一個ずつ八分目まで油を入れ、灯心を置いてから、煙椀で蓋をする。風が入らないようにすることが大切である。約四、五刻、煤を煙椀につけさせたら、こ

れを掃い落す。煤を掃う度毎に灯心を皿から取り出し（て、新しいものと取り替える）。灯心の先端の燃えた部分は箸で剪り取って水盆の中に棄てる。そうしないと花のような形にかたまった灯心の燃えかすが焔の外に出て、それを覆うような形になってしまい、煙が起らなくなるからである。煤は鵞鳥（がちょう）の羽で掃って瓦製の盆の中に入れ、一晩経ってから、始めて一つの容器の中に集めて入れる。油皿の上は必ず空の煤のついていない煙椀で覆い、煤のついた椀はこの新しいものと取り替えて掃い落す。巴豆（はず）を三、四粒たたいて砕いて油皿の中に入れて煙を立てさせると、煤の得量が多くなる。煤を掃う回数は一日に二十数回がよく、掃うのが遅れると、煤が老化して力がなくなり、量は多くなるが、色は黄色を帯びるようになり、墨にした時に光沢もなく、黒さもたりない。煤取りの部屋の中には水盆を十枚置くことができる。朝から晩まで油を燃やすが、風のない日に行うのがよい。もし風があったり、部屋に隙間があったりすると、煤の得量が少くなる。夏の煤も老化して、つやがなくなるから、夏には必ずたびたび冷却用の水を取り替えることと、灯心草の本数を減らすのがよい。桐油百両（3730g）から煤八両（298g）を取るようにするのが一番よい。油が煤の中に落ちたり、赤い焔を立てたりするのは避けるべきである、灯心の燃えかすが煤の中に落ちると使いものにならなくなる。

## 篩煙（さいえん）（煙をふるいにかける）

風の入らない部屋の中で、目の細かい絹で作った篩（ふるい）を手でおさえ、ゆっくり少しずつ煤を篩って、きれいにしたかめの中に落としてやる。このようにして（煤を掃い落すのに使った）羽毛や紙屑を除き、紙を貼った篭の中に貯え、縄で梁にかけておく。その場合、壁に近付けると湿気を吸うおそれがあるから、壁から離しておくことが必要である。使うたびごとに必要量を取り出すようにする。篭のかわりに皮紙で作った袋の中に貯えてもよい。煤は非常に軽いものであるから、（篩う時にはかめの中で行うべきで）決して外で篩ってはならない。外で篩うと煤が舞い上がって、部屋中一杯に飛散してしまうからである。）

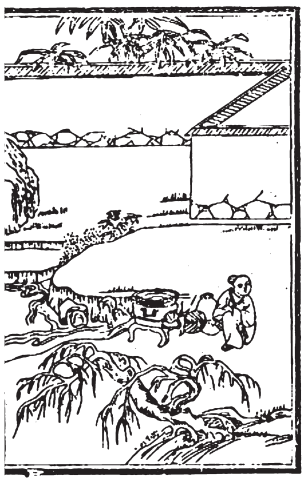
## 鎔膠（膠を溶かす）

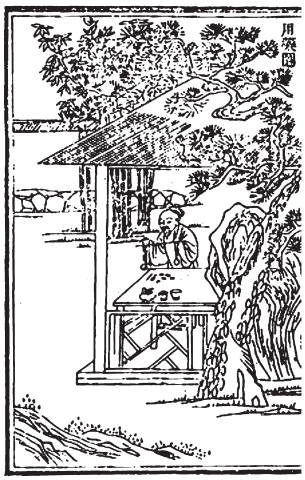



魚のうきぶくろで作った魚鰾膠はまっ白でまわたのようなものを用いる。この膠を使う時には冷水に一晩浸しておいて軟らかにしてから、よく切れる刃物で切り刻み、膠一両（37.3g）につき五粒の巴豆を入れ、槌でたたいて砕いて膠とよく混ぜ合わせ、竹の皮で包んでかたくしばり、数十回ぐらぐら煮てから竹の皮を除き、熱いうちに口の広いかめの中に入れ、急いで杵いて完全にどろどろにして粒が残らないようにし、薬物を煮出した汁に混ぜて、重湯煎の上で煮て溶かす。牛の皮で作った牛皮膠を使う時は（魚鰾膠とは扱いが違っていて）黄色ですきとおっていて、製法が間違っていないものを選び、（同じように煎じても十分に膠になりきっていないもの（つまり膠の成分だけを溶かし出して固めたものではないもの）は完全には溶けない）指先ほどの大きさにつぶし、使う前にまず少しの水をかけて潤し、軟らかになったのを見届けて薬汁を加え、重湯煎にかけて煮て溶かす。以上の二種類の膠はどちらも溶かす場合には、弱い火で煎じることが大切である。長い竹の箅で休まずにかきまぜて様子をうかがい、沫が消えて透明になるのを目安とする。（粒が残らないように完全に）膠を煮て溶かし、澄んだ膠の液を作って使えば、墨はあぶらぎることがない。これが墨造りに際して最も大切なことがらである。桐油から作った煤十両（373g）につき、一、二、十、十一、十二月は牛膠四両半（168g）、薬水十両（373g）を用い、四、五、八月は牛膠五両半（205g）、薬水九両（336g）とし、六、七月は牛膠六両（224g）、薬水九両（336g）と（して、季節によって膠の量を加減）する。松煙のときにはその一斤（596g）毎に牛膠四両（149g）または五両（187g）の割合いとし、薬水は季節に関係なしに常に半斤（298g）とする。春と冬は膠の量を減らして水を増し、真夏と夏の終りと秋の初めには膠を増して水を減らすのがよい。膠を溶かした汁を沪す時には織り目の細かい絹か綿で沪すのが一番よい。もし（粗い目の）布で沪すと、かすも一緒に通ってしまって、墨を造ってもよくできない。薬物を煎じた汁も絹を重ねて沪して使う。魚のうきぶくろの膠はそれだけで使うめきではなく、牛膠九分（3.4g）に対して魚膠一分（0.4g）の割合に混ぜて使うべきである。もしその量を増して二分（0.8g）にすれば、筆にからみついて字を書きにくくする。世間の人たちは蘇東坡の詩に「魚膠、万杵にして熟す。」という句のあるのをみて、墨を造る時には魚膠を使うべきであるといっている。馬鹿者には東坡の夢がわからないというわけである。一方、墨を売る人も誰一人としてそれが間違っているという人はなく、うそをついて魚膠がよいといい、人々はそれをきいて、全くそのとおりであると思っている。まことに笑うべきことである。だいたい牛膠を使う時には、よい牛皮か鼓を作るところで切り落とした、あまりの牛皮を煎じて作ったものがよい。皮をなめす職人のところで、皮をこする時にできた屑を使って作った膠のようなものは、力が弱くて使い物にならない。膠はその質がよければ

初めて力が出るもので、その使用量を減らすことができ、それを使って造った墨は膠が少くて煤が多いため、黒さが倍増する。このようなものを軽膠の墨といい、墨の色は黒く澄んでいて、すぐに売るのに都合がよい。ただし、このようなものは長い間、しまっておくと色が悪くなるおそれがある。もし、いつまでも使うことのできる墨を造ろうとするならば、桐油の煤十両（373g）に、古い牛膠四両半（168g）を古い魚鰾膠を半両（19g）と秦皮（しんぴ）と蘇方木半両（19g）ずつと一緒に煎じて作った濃い汁を加え、こねて混ぜ合わせ、更に蒸して杵でついて造るのがよい。このようにして造った墨は年月が経つにつれて、ますます黒く、ますます堅くなるものである。私は昔、荊渓県（けいけいけん）の呉国良が作った牛膠墨を手に入れたが、この墨はそれから今まで五、六十年も経っているが、少しも質の落ちることはなく古墨のようである。（世間では牛膠墨はよくないとされているが、これからみても）牛膠の墨がよくないというようなことはいえないではないか。熱膠墨（ねつこうぼく）というものを造る人があるが、これは膠の汁が熱いあいだに使うということではない。膠を溶かす時に薬物の煎じ汁を入れ、膠を煮て透明になって粘り気が十分に出るまで待ち、その間にもし薬水が少くなれば追加し、このようにして十分に使用に耐える膠の液を作ってから始めて煤を混ぜるようにすべきである。できた硬い塊は必ず甑（こしき）に入れて十分に蒸し、杵でついて熟剤にし、それを取出して力を入れて揉んで軟らかにし、丸めたり、のばしたりすることのできるような墨の材料ができたら型に入れる。このようにして造ったものを熱膠墨というのである。これに対して冷膠墨というものを造る人がある。これは膠の汁が冷えるまで待ってから使うというのではない。ただ膠を薬水中に入れて溶かし、澄んでいようと濁っていようと、十分に粘り気が出ていようといまいと関係なく、煤の中に入れ、丸めて墨の塊とし、型に入れたものである。従って蒸しもしないし、杵きもしていないから、膠の混り具合も均等ではなく、その見たところも品質も非常に劣っている。このようにして造ったものを冷膠墨というのである。だいたい膠を造ったり墨を造ったりするのは一月、二月、十月、十一月にすべきである。そのほかの月に造ると、暑過ぎる時には、溶けた膠の汁がかたまらず、造った墨は砕けることが多く、寒過ぎると、膠の汁がにこごりになって分離してかたまるために、造った墨は裂けやすくなる。従って小型の墨ならば造れないこともないけれども、大型の墨は決して造ってはならない。

## 用薬（ようやく）（薬を用いる）





薬物を使用するのは、光沢を増したり、色をよくしたり、香をつけたりするためだけではない。その目的とするところは長く経っても膠の粘り気が弱くなったり、墨の色が悪くなったりしないようにし、いつまでも犀角や石のような堅さを保ち、つやもゆたかさもきめの細かさも悪くならないようにするのにある。ここに昔の人の薬物の使いかたの巧みさがある。しかし薬物には悪い影響もよい影響もあるから、そ

のことを知っていなければならない。例えば緑礬や青黛を入れると墨が変質しやすくなり、麝香や鶏子青は湿気を引きやすく、ざくろの皮や藤黄を使うと黒さが減る。一方、秦皮では書いた字の色が変らず、烏頭を加えると膠の力が弱くならず、紫草や蘇方木、騏驎竭、朱、金箔を加えると色がよくなり、あでやかさが出る。一般にあでやかさのことを雲頭といっている。魚膠は墨の黒さは増すけれども、多く入れ過ぎると粘り気が強過ぎて、筆の先が動きにくくなる。牛膠も同じ性質を持っているが、そのほかにこの膠では雲頭が認められず、色の黒さも少い。魚膠も牛膠もどちらも古いものがよい。多数の香薬を混ぜて膠と煤の匂いを消そうとする人があるが、この人たちはただ香りをよくすることだけを考えて、墨の質を低下させ色を悪くするということは知らないのである。それだけではなく、甑に入れて一度蒸すと、添加した薬物の香気は全く消えてしまうのであるから、このようなものを用いたところで何の益もないのである。ただバラの花から採った香水を入れた墨は、その香りが長く経ってもなくならない。その次によいのは竜脳と麝香で、この二つは煤と膠を十分に練り合わせて丸や棒状にする時に入れる。寒い時には前の晩から、暖い時にはその日の午前四時から薬を水に浸し、どちらも午前八時から十時頃になったら、薬物と一緒に鍋に入れ、煎じて煮つめ、絹で沪してかすを除き、澄ませておりを除く。この薬液を使う時には、まず膠をあぶって膨張させ、これに細かく磨りつぶした杏仁を加えて、むらがないようにかきまぜ、目の細かい絹でぬぐって粗い破片を除いてから、前に述べたようにして沪過した薬液を注いで、重湯煎で煮て溶かすのである。これに煤をまぜて墨にする。この墨を乾かして使ってみると沫も立たないし、あぶらぎることもない。薬物の中には（溶かして使うのではなく）磨りつぶして細かい粉末にしてから、混ぜ合わせる方がようものがある。竜脳とか麝香、朱、藤黄、螺青、金箔といったようなものがそれである。しかしながら墨の黒さを増そうとするならば、まず第一に混り物のない煤を用い、次によい膠を使ってその量を減らし、第三に何万回も骨惜しみせずについて十分に練りあげることで、この三つは古今を通じて変らない法則であって、（補助的に用いるならばよいが）薬物の力に全く頼るというようなことはしないことである。

### 搜煙（煤と膠を和して墨玉をつくる）

精製した煤を一斤（596g）秤って、台の上に置いた白瓷の盆に入れる。次に薬液と一緒に煮て溶かした膠の汁を、熱いうちに綿で沪して煤の中央に注ぎ、急いで手でかきまぜて均一にする。この膠汁を入れてまぜる時には細かい砂のような手ざわりにすることで、むしろ乾き気味の方がよく、湿り過ぎてはいけない。これを手で丸めて毬のような形にする。もし盆の底に煤と膠がくっついていたら、ひらがねで削り取り、それを集めて丸めて毬のよ

うにする。これをまとめて布で一緒に包み、甑(こしき)に入れて蒸す。大きな墨は非常にかきまぜ（て均一にし）にくく、軟かいのがよい。硬くすると、乾燥した時に裂けてしまうからである。手で形をきめて作る墨と表面に紋理をつける墨はそれほど軟かでない方がよく、型に入れるものは非常に軟かにした方がよい。硬くすると型から出しにくく、でき上がりが美しくない。滿洗光墨(まんせんこうぼく)にするものも軟かい方がよい。要するに大切なことはよく揉むことで、揉む回数を多くすれば、墨が変質するようなことは起こらない。煤に膠を混ぜて墨を造るのは一、二、三、九、十、十一月に行うべきで、ほかの月はよろしくない。

### 蒸剤（墨玉を蒸す）

陶または木で作った甑を使い、これを鍋の中にはめ込むが、鍋の中の水の面が甑の底に近づかないようにする。甑の底には青皮をはぎ取った割り竹を敷きつめ、その上に前項で述べたように布で包んだ毬(まり)状に丸めた墨の塊を置き、竹の皮で作った蓋をかぶせ、周囲に上記が洩れないようにする。強い火で十数回ぐらぐらと煮沸させて蒸し、甑の中の蒸気が凝縮して、蓋から雨のようにぽとぽと落ちるのを見届けたら、毬を甑から取り出し、熱いうちに臼に入れて、杵でつく。蒸す時には、途中で火をとだえさせてはならない。とだえさせると（中途半端な蒸しかたになって十分に蒸気が行きわたらず）蒸されたところと熱気の届かないところができて均一にならない。一つの墨について三、四回繰り返して蒸す。もしついている間に、乾いてきて硬くなったら、薬汁を少し加えてもう一度蒸す。塊の重さを秤って適当な大きさにしてから長時間放置したために硬くなってしまい、鎚で打っても軟かくならず、揉んでも拡がらないものも、もう一度蒸してから次の操作にかかるべきである。

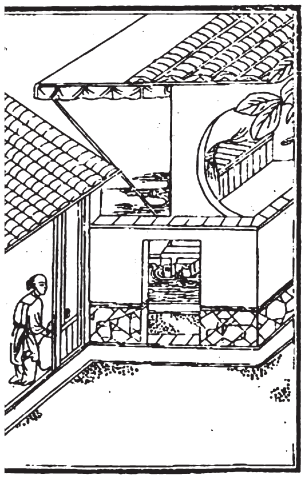
### 杵擣(しょとう)（杵でつく）

青石で造った臼で、外側は方形でも円形でもかまわないが、内側は釜のように深い円形で滑らかで光沢のあるものを用いる。杵(キネ)は檀木(だんぼく(まゆみ))で造った長さ六尺余のものである。十分に蒸した墨の毬を（甑から）取り出して臼の中に入れ、熱いうちに手で押さえて平らにし、少しずつ杵でつき、空気を追い出して全体を一様に隙間のないものにする。つまり二人で交互に杵でつかせ、むらのない餅のようなものができあがったら、二等分して、一方は甑で蒸し、残りの半分はそのまま臼の中でつき、練りあがったのをみたら、これを甑に入れて蒸し、甑の中に入れてあったのを取り出してつく。このようにして蒸すのとつくのを交互に繰返し十分に練りあがったら、つくのをやめにする。大切なのは杵でつくことである。つき続けていると、周辺部がだんだん上に押し上げられて椀や皿

のような形になるから、そうなったら周辺部をたたみこんで、またつく。かりに午前八時からつき始めたとすれば、正午頃になってちょうど練りあがる。この墨の塊はつき続けて温かさを保つことが必要である。途中で休んでぐずぐずしていると、かたまってしまって、たたいてものびにくくなる。もし塊がころころしてつきにくい時には、一人が木の鍬（すき）でおさえて動かないようにしてつく。もし乾いてきて杵に粘りつくようになったら、薬を少しばかり塊の上に注ぐが、量を多くしてはいけない。つく回数は七、八百回から千回ほどで、墨の塊が柔軟になり、練りあがるのをめやすとする。昔の言葉に「杵でつくのは回数をどんなに増やしてもかまわない。つけばつくほど、できあがった墨はますます堅くなる。」というのがあるが、これがそのことである。臼から出したら、熱いうちに手でもんで棒状にし、大、小適当な長さに切って重さを秤る。この操作は、ぐずぐずしていると固まってしまって、のばしにくくなる。

### 秤剤（ぴんせい）（墨玉を小さくちぎり天秤ではかる）

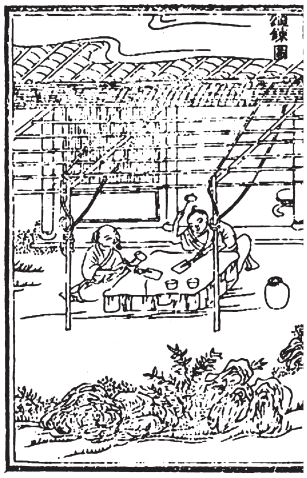
臼から取り出した十分に練りあげた塊を机の上に置き、よじりながら揉んで長い棒状にし、湿った布で堅く隙間なくつつみ、温かな釜の中に入れておく。一本ずつ取り出して切って小さな塊を作り、重さを秤って、棚の上に各段毎に同じ重さのものを揃えて並べる。だいたい湿った時に一両四銭（52g）、つまり十四銭の重さのものは、乾かすと一両（37.3g）の重さになる。ほかの大きさのものも、これにならって重さをきめる。秤ったならば、その小塊を瓷製のかめの中に入れ、湿った布でかこって蓋をする。短時間、湯の中に塊を入れてから、取り出して鎚でうつこともある。



### 鎚錬（ついれん）（鎚でうって墨玉をねる）

五人交代で続けて休みなく、それぞれ鉄の台と鎚を用意して、各人、墨の塊を一個ずつ取り、鉄のかなばさみで挟んで台の上に動かないように置いて、鎚でうつ。二百回余り鎚でうつと、きめの

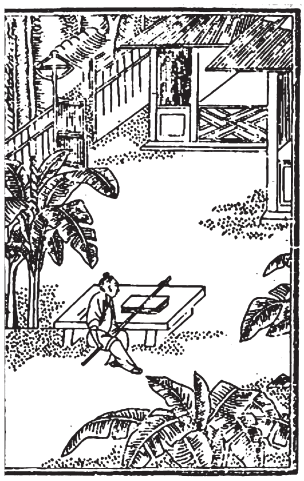
あらかった麤剤が光沢のある光剤となる。光剤を再び二百回余り鎚でうつと、始めて硬い硬剤ができる。これを更に二百回余りうつと十分に練りあげられた熟剤ができあがる。これは麪剤と似ているが、こうなると始めて丸めたり伸ばしたりすることができるようになる。鎚でうつ時に乾燥して鎚に粘りつく場合には、少量の薬汁の中に短時間つけて潤す。昔の言葉に「ひとうち、ひとたたみ、力を入れて手を下して、始めてできあがる。」というのがあるが、それはこのことである。



## 丸擀（鎚で打った墨玉をよく練り、丸める）

鎚でうって十分に練りあげた墨の原料を、表面の滑らかな光沢のある硬い木の机の上に置き、まるめて揉んで軟かにし、一塊ごとに竜脳や麝香を入れ、もう一度まるめて揉んでむらなく均質にしてから、まるめたりのばしたりすべきである。大切なことは一気に揉んで造りあげることである。もし揉みかたが足りなくて十分に練られていないと、硬い粒ができたり、裂け目ができてそれが十分にくっつかず、炭のような紋様ができたりする。この墨の塊は冷やしてはならない。冷えると乾いて硬くなり、揉みにくく、潤いとねばりのある状態に練りあげることはできない。大きなものは揉みにくい。たとえば重さ四両（149g）のものは、二つに分けて、二人がかりで一個ずつを揉み、揉んで十分に練りあげられたのを見届けたら、もう一度併せて一塊とし、更に揉んでから始めてまるめたりのばしたりすべきである。急いで揉めば光沢のある光剤となり、ゆっくりすると表面に皺ができて皺剤となる。一塊ごとに造りあげ、途中でやめて後から続けるというのはよくない。揉んで必ず弾丸のような形の、球形で表面に皺や凹凸がなく、少しも継ぎ目のないものを造りあげてから、摶板でのばし、形をととのえ、圧して平たくしてから型に入れ、次に述べるような香料を入れる。このようにして造ったものは、長く磨っても香がなくならない。薔薇露と麝香、竜脳の細末としたものを、もう一度磨りつぶして粉のようにし、音をたてなくなったら用いる。このような薬品はいつも少しだけを、まるめたりのばしたりした塊にまぜる。

## 様製（墨の形を整える）



墨の様式は古人の作品を模範にするのがよい。大小厚薄には制限はない。ただ厚くて大きいものは耐久性があって古くなるとよくなり、薄くて小さいものは新しい時がよい。厚くて大きなものは細工が困難であり、薄くて小さいものは造りやすい。そのために製墨職人たちは厚くて大きなものを造るのは喜ばない。しかし余り大きすぎると使う時に都合が悪いし、余り小さすぎると墨の色が出にくい。要するに厚くて大きいものがよいけれども、三、四両（112g ～ 149g）の大きさでちょうど中庸を得たものには及ばないものである。古墨の造りはたいてい地紋があってようものである。しかしその造りかたは秘密にしていて他人に伝えなかったため、知っている人は少い。そこで長年の後にはこの方法が埋もれてなくなってしまうであろうと心配して、ここに書いておくこととする。どうかいつまでも伝えられて消えずに残ることを希うものである。

**斜皮紋法**　墨の塊を揉んで十分に練りあげてから、弾丸のような形にまるめて、風の当るところに置く。暫くしてから、また軽く左にひねって（螺旋状の）紋様をつけ、長くのばしてから圧して平たくして、型に入る。型から取り出してから空気に当てて乾かし、形がくずれなくなったら灰の中に入れる。

**古松皮法**　例えば八寸（24.9cm）の長さの墨を造ろうとする場合には、六寸（18.7cm）の長さの棒状の塊を作り、紙簾で早く動かしながら火で乾かす。紋様をあらくしたい時には強い火で乾かし、紋様を細かくしたい時には弱い火で乾かす。表面がやや乾いたならば、表面がざらざらした長さ八寸の摶板で、力を入れて圧して平たくすれば紋様がつく。冷えたのを見届けて灰に入れて乾かし、乾いたならば刷毛で掃ってきれいにし、適当に字を彫って金を入れる。

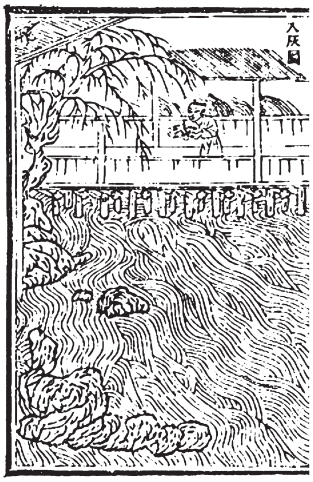
**金星紋法**　軟かい墨の塊をまるめて弾丸の形にし、濃い膠の液をほとんど表面全体につけてから、金箔でまわりをすっかり包み、風の当るところに置く。暫くしてから、やや乾いたのを見届けたら、左に向って揉って紋様をつけ、長くのばしてから、圧して扁平な形にし、型には入れずに紙で包んで灰に入れる。乾いたならば、蝋をかけずに玉で磨い（て光沢を出し）、好きなように字を彫って、青い顔料をその中に埋める。

**銀星紋法**　造りかたは前の金星紋法と同じで、ただ（金箔のかわりに）銀箔で包むことが違っている。

**羅紋法**（らもんほう）　造ろうとする墨の形が方形であっても円形であっても、目のつまった硬いうすぎぬを、木型の大きさに合わせて切って膠の液につけ、粘らせて型の中に入れる。上、下両面に置く場合と一面だけにすることもある。一方、軟かい光剤子を取って、のばして平に圧し、型の大小に合わせて中にはめこみ、力を入れて圧して型の隅まで一杯になるように満たし、取り出してから紙に包んで灰に入れて乾かす。（灰から取り出したら）刷毛で掃って光沢を出し、適当に字を彫る。字の彫ってある型の中に入れることもある。

**嵌金字法**（かんきんじほう）　牛膠を溶かした液に少量のしょうがの汁を加えて、むらのないように混ぜ合わせる。これを筆につけて、彫った字の凹みに塗り、乾いてきたのを見たら、大きさを合わせて切った金箔をその上に当て、紙で約一時間包んでおいてから、新しいばら筆で払って余分な金箔を取り去ると、光り輝いた金色の字が得られる。この方法は最もすぐれたやりかたである。

## 入灰（にゅうばい）（墨を灰の中にうずめて水分をとる）

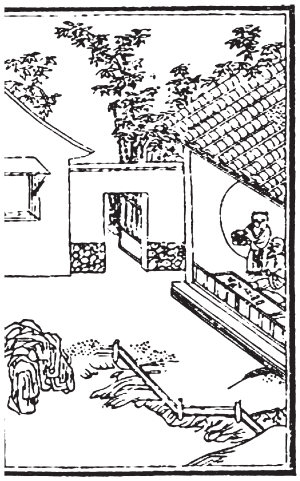



墨を乾かすためには、稲藁を焼いて造った後、水を注いで（可溶物を除いた）敗灰といわれる灰を用いるのがよい。灰は池（の水に物を浸すように水分を含んだ墨の塊をそ）の中に埋めた時に、水分を吸う性質が強くないものはなく、日に当てて乾かし、目の細かいうすぎぬで篩って（小さな粒子にして）使う。木の四角な浅い箱を灰池（という乾燥用の灰を入れる容器）にする。季節、天気に関係なく、箱の底に敷く灰は、いつでも一寸以上の厚さにし、墨の上にかぶせる灰は一寸以下にする。灰はおさえて平らにすることが必要であるが、力を入れて堅く圧えつける必要はない。堅く圧えつけると湿気をしみこますことができなくなるからである。小さい墨を埋める時には必ずしも紙で包む必要はないが、大きい墨の時は必ず紙で包む方がよい。それは一つは色を悪くするのを防ぐからであり、第二には灰が墨の紋様の中に入り込まないようにするためである。毎日一回、灰を換えるが、その時には古い湿った灰の半分を新しい灰と取り換え、均等に混ぜ合わせて使う。墨を埋めてある灰は風に当ててはいけない。風に当てると墨にひびわれができる。灰から出した時にあまり軟か過ぎるのもひびわれができる。といって灰から出る時に乾き過ぎていると、割れてしまう。軟か過ぎず、硬過ぎず、適当な状態の時に灰から出すべきである。灰から出したら刷毛で掃って灰を落とし、竜脳と麝香と錫（すず）を混ぜたものをこれにつけ、紙に包んでしまっておくが、風の通るところに置いて吹きさらすと、曲ったり割れてしまう（から注意が必要である）。灰に埋めた日と灰から取り出した日は記録しておくべきである。だいたい二、三、八、九月には灰池の中に墨を二重に埋めることができるが、四、五、六、七月は一重だけしか埋められ

ず、十、十一、十二、一月には三重にすることができる。三重にする場合には底に灰を一寸（3.1cm）の厚さに敷いてから、墨を一列に並べ、その上に灰を一寸の厚さにかぶせ、また墨を一列に並べ、その上に灰を一寸かぶせ、もう一列、墨を並べてから、最後に灰を一寸かぶせる。三重というのはこの意味である。春と冬は一、二銭（3.7g ～ 7.4g）程度の重さのものを埋めた時には一日と二晩で灰から取り出し、秋と夏には一昼夜で取り出す（のが標準である）。また春と冬に一、二両の重さのものを埋めた時には二日三晩で灰から取り出す。おおよそこのようにするものであるが、それほど厳しく日数にこだわる必要はない。ただ墨を互いにうちつけてみて、乾いた音がすれば灰から取り出してよい。以上は松煙墨を埋める場合のやりかたで、油煙墨の時には少し遅く灰から出すのがよい。それはもともと油煙墨は薬水の使用量が松煙墨の二倍であるために、乾くのが遅いのである。夏は高い建物の上で北側の涼しいところに灰を置くのがよく、冬は隙間のない南向きのところがよい。冬には灰を厚くするのがよい、夏には薄い方がよい。夏と秋の温度と湿度の高い時は、膠がむれて腐る心配があるために墨を一番造りにくい時期で、製造をやめるべきである。真冬の非常に寒い時も、膠が凍って変質してしまうおそれがあり、造りにくい時期である。冬は乾いていない墨を長い間机の上に置いてはならない。急いで灰の中に埋め、長い間入れておいてから取り出す。灰に入れるのが遅れると、白っぽくなって松の煤のような色になり、こすっても光沢が出なくなる。灰が湿った時には日に当てて乾かし、曇っているときには火にかけて乾かす。冬の寒い時には灰の箱を置く部屋を一日中、火をたやさずに温めるが、火が強すぎても直接火にあててもどちらも墨の質が低下する。注意して行うことが必要である。大型の墨を乾かす時には、少量の乾いた灰を箱の底に平らに敷き、紙を（墨の）上下にあて、その上に灰をかぶせる。一日経ったら墨を取り出し、湿った灰を取り替えて前のようにする。このように墨にあてる紙と上にかぶせる灰を毎日一度ずつ取り替え、これを五、六日ほど繰返し、墨だけを乾いた灰の中に入れる。たとえば午前八時に換えたら、十二時と午後八時に換えるといったように一日三回乾いた灰に換え、五、六日ほどして墨が十分に乾いてしまったのを見たら、取り出して刷毛で灰を掃うが、まだ蝋をかけてはならない。厚紙で包んで風のない場所に置き、半月後に始めて風に当てるようにするとよい。重さ半斤の墨を造ろうと思ったら、この方法に従うのがよい。

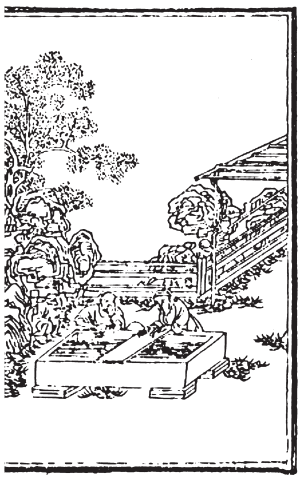
### 出灰（しゅつばい）（墨を灰の中から取り出す）

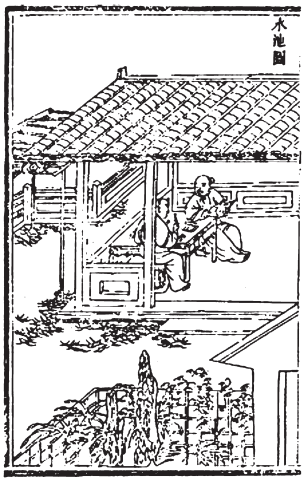
墨を灰の中から取り出し、刷毛をかけてきれいに掃いきよめて、目の細かい篩の中に並べ、一日、二日かげぼしてから、もう一度刷毛をかけて、風の当るところに置いて、一日、二日、吹きさらしておく。表側も裏側も十分に乾いたならば、粗い布でこすって、表面に残っている浮いた煤を取り去ってから、強く刷毛をかけ、蝋に浸したあとにまた刷毛をかけ、光沢が出るま



で続ける。墨が乾いてから刷毛をかけると光沢がでて色が黒くなるが、乾かないうちに刷毛をかけると、表面は灰色になって、長い時間をかけて刷毛をかけても黒くならない。ただし水洗してから磨きをかけると、漆のようにきれいな光沢がでる。

### 水池（墨の表面の汚れを取り仕上げる）






石の水槽に水を入れ、その上に板を渡し、板の上に墨を置く。使い古した藁履の底の細い藁に水を少しつけ、こすって墨の表面を平らにし、絹の布できれいに拭き取り、そのまま放置する。乾いたのを見たら、刷毛をかけ、粗い布でこすって光沢を出し、更に馬脳をこすりつけて磨きをかけ、終ったら袋の中に入れて高いところに懸けておく。十分に乾いたのを見届けたら、紙に包んで貯蔵する。（その後は）よく晴れた日を撰んで取り出し、乾いた布で拭って、風に当てるが、短時間で取り込む。厚くて湿度の高い時には、火をかけて焙るのであるが、その温度は人の体温程度にし、それ以上熱くしてはならない。二、三回夏を越すと、膠は完全に乾き切り、湿気を引くことはなくなる。灰から出したばかりの墨も焙って乾かすことができるが、その方法は篭の底に紙を一枚敷いて（墨を入れ）、灰を入れてその中に真赤にした炭団一個を深く埋めたかめの上置いて、少しずつ熱をかけて湿気を除き、杉の箱の中に入れる。その箱は外側には黒い光沢のある漆を塗り、内側には塗らず、台の上に置く。人気の多いところに置く時は、時間を置いて熟させた漆を墨の表面に塗って、湿気と蒸気の侵入するのを防止する。作ったばかりの新墨などは、一度湿気をひくと、その精がとんでしまって、使いものにならなくなる。

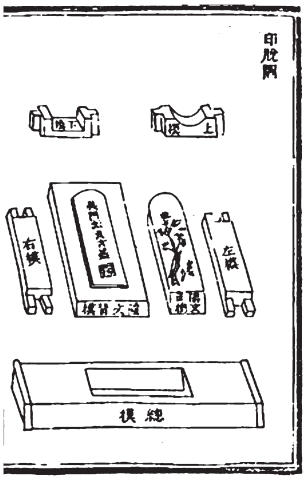
### 研試（出来上がった墨を試墨する）

墨はゆっくりと前後にまっすぐに磨れば、自然に沫が出ることなく、澄みきった調子の液が得られる。もし急いで縦横に乱暴に磨れば、自然に沫が出て、あぶらぎったように濁る。よい墨は磨った時に犀角を磨るようであり、悪い墨は磨ると泥を磨るような感じがする。李陽氷のことばに「墨を磨るには手を止めることなく磨りつづけ、途中で長く休んではならない。長く休めると塵埃がまざり、膠の効力がなくなって泥のようになってしまい、筆につけて書こうとしても思うように書けない。」というのがある。墨の色は紫色を帯びて光沢のあるのがよく、黒くて光沢のあるのがその次、青色を帯びて光沢のあるものは更にそれに次ぎ、光沢があっても白っぽいものはよくない。光沢と色はいずれか一方がなくてもよいというものではなく、長く経っても変わらないものがよい。ただ（光沢があるといっても）膠の光沢が出ているものはよくなくてきらわれる。古墨には色はよいが光沢のないものが多い。これは湿気で蒸されて膠が変質したためにこうなったもので、よい墨では

ない。美しい墨は黒くて落着きがあり、明るくて艶があり、潤いがあって汚れがない。このようなものを紫光墨の絶品という。墨と墨を直接くらべるのは紙に書いてくらべるのに及ばない。硯での磨り具合とか爪で試してみる人もあるが、どちらもよいとはいえない。蘇東坡も「世の中の人は、墨について、黒いのがよいと論じている人が多く、光沢は重視しない。光沢があっても黒くないものは勿論使い物にならないが、黒くても光沢がなく、趣きがなくてすぐれた彩(いろどり)がないものも使う甲斐がない。清らかな光沢があって落着きがあり、深みがあって小児の瞳のように澄んでいるものがよい。」といっている。梅雨期に墨を使う時は、磨り終わったならば拭って乾かすことが大切で、このようにすれば湿度と温度によって蒸されて変質することはない。だいたい墨を磨る時には水を少しずつ落として磨るべきで、硯の海の部分に墨を入れて、水を引き上げて磨ったりしてはならない。

## 印脱（墨を木型に入れ模様をつける）

練りあげた墨を丸めるのに使う摶板は長さ一尺一寸、幅三寸、厚さ一寸の板である。底板として使う字板は長さも厚さも一定していない。つまり板の中央部を墨の大きさに合わせて、周囲より二分ほど高くしておき、ここに墨に印したいと思う字や画や模様を彫りつける。この部分の四周の低い部分は幅二寸余りとし、ここに横板を置く。上に載せる捺板も字板の中央の突起部と同様に作る。この板には外側に底板のような余った部分はなく枠の中にきちっとはめこむ。墨の厚さは原料の多少によってきまる。板は全て平で表面が平滑である必要があり、棗の木で作る。摶板で材料をおしてのばして、目的に近い形にし、字板の上に置いてから、捺板を当てて傾かないように圧して、表面の模様をつける。型にはめて大型の墨を造ることは非常にむつかしい。材料を型の中に一杯に入れても、固くしめつけることが困難である。この時にはうどんをのばすのに使うまないたを捺板の上に置き、その上に天秤棒を渡し、（片方の端を固定してから反対側の端に）坐って、圧力をかけるのがよい。そうすればすみずみまで一杯につまり、稜も角もきれいに出すことができる。墨の木型は七個の木片でできている。四個は側面の板にし、表面と裏面にあたる二個には銘文や画を彫っておくが、その際に一方を陰刻、他方を陽刻とし、それを向い合せにして圧して型をうつさせる。そのほかに堅い木のまん中に穴をあけた板をつくてたがとし、この中に木型を入れ、圧力をかけた時に横板が外れな



いようにして、墨の大きさを一定にする。墨を取り出したら、木型もたがから外す。

## あとがき

墨を勉強すればするほど、調べれば調べるほどその奥行きの深さに吸い込まれるような興味深い四十数年であった。

中国商（殷）の時代に文字（甲骨文字）が生まれるとほぼ同時に墨は生まれ、文字と共に発達し、3,500年もの間文化を支える裏方としてその役割を全うしてきた。

1957年（昭和32年）液体墨が開発され、墨を磨るという面倒な作業から解放されるとたちまちの内に固形墨は横に置かれ、今や液体墨の時代になってしまった。固形墨は、中国前漢（BC206～AD 8）の時代に墨丸（ぼくがん）として生み出されて2,000年、この間実用一辺倒の物から工芸的価値の高い、形と意匠を極め、墨色を極め、墨を磨る、書くといった使う満足感を極める、創意工夫が続けられてきた。それが故に墨の研究は墨で書かれた記録や、書画を通して時代、時代の人々の有様が嗅ぎ取れる興味深さが満載されていたのである。

このような固形墨から液体墨に移った墨が、これからどのような変遷をたどるのか、今度は学んだ歴史から未来を思い起こし、その役割を見つめなければならないと思う。そしてこのことは、書く、画く、描くという人本来のもつ文化の指向を読み取ることかもしれない。

3,500年の歴史と文化を支え続けた墨、その墨に四十数年もの間かかわりを持てたことに大きな喜びを覚えている。

2018年８月　　綿　谷　正　之

## 引用・参考文献

中国製墨資料、1986、株式会社呉竹精昇堂、pp3,9-13,64-89,130-138, 151,374-421。

## 付記　宋・明代の度量衡

| | 度 | | 量 | | 衡 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 宋 | 1尺（10寸） | 30.27 cm | 1斛（5斗） | 33.25 ℓ | 1石（120斤） | 71.52 kg |
| | 1寸（10分） | 3.027 cm | 1斗（10升） | 6.641 ℓ | 1斤（16両） | 0.596 kg |
| | 1分 | 0.3027 cm | 1升（10合） | 0.664 ℓ | 1両（10銭） | 37.3 g |
| | | | 1合 | 0.066 ℓ | 1銭（10分） | 3.73 g |
| | | | | | 1分 | 0.373 g |
| 明 | 1尺 | 31.1 cm | 1斛（5斗） | 50 ℓ | 1石 | 71.52 kg |
| | 1寸 | 3.11 cm | 1斗（10升） | 10 ℓ | 1斤 | 0.596 kg |
| | 1分 | 0.311 cm | 1升（10合） | 1 ℓ | 1両 | 37.3 g |
| | | | 1合 | 0.1 ℓ | 1銭 | 3.73 g |
| | | | | | 1分 | 0.373 g |